南風原町社会福祉協議会

福祉作文コンクール

作 品 集

令和４年３月５日

社会福祉法人
南風原町社会福祉協議会

ごあいさつ

社会福祉法人　南風原町社会福祉協議会

会長　前川　義美

福祉作文コンクールの作品集発刊にあたりご挨拶を申し上げます。

本コンクールのねらいは、募集要項にも明記している通り、「児童・生徒を対象に身近な福祉体験・ボランティア体験をとおして感じたことを作文に表すことで思いやり・たすけあいの心について考える機会づくりに資するとともに、福祉意識の醸成と更なる高揚を図ることを目的」に五年に一度開催される南風原町社会福祉大会に併せて今年度から実施致しました。

今回は二十九点の応募作品が寄せられました。今後、このコンクールが浸透し定着することを目指します。これは学校現場の先生方のご指導とご協力をはじめ、各関係者のご支援の賜と感謝を申し上げます。

さて、今回のテーマは、児童・生徒が普段の生活を通して福祉について感じたこと、考えていることなど、自分の体験や身近な事柄に対する感想、意見などを述べた未発表の作品体験例、障がいのある方々との交流やお年寄りとのふれあい、福祉に関するボランティア活動などの設定で応募作品全点を本冊子に収録致しました。

作品応募された皆様、誠にありがとうございました。入選入賞された皆様、誠におめでとうございます。本日の栄誉は、皆様自身の努力のたまものであります。受賞を機会にますますの福祉に対する想い、心豊かな人生に結びつけていただきたいと希望いたします。

この作品集は、町内の小学・中学校・各関係者へ配布いたしますので、皆様でご活用いただければ幸いです。

結びになりますが、本コンクールにご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

目次

ごあいさつ

審査講評

小学四年生の部

最優秀賞 …… 5
『わたしに出来る事』
津嘉山小学校　嘉手納　桜咲

優秀賞 …… 7
『おばあちゃんとバリアフリー』
北丘小学校　森田　桃李

佳作 …… 9
『高齢者という名の上昇気流』
津嘉山小学校　阿部　純華

佳作 …… 11
『福祉とおばあちゃん』
津嘉山小学校　兼島　悠來

佳作 …… 13
『ひぃおばあちゃんの笑顔』
北丘小学校　宮城　昊愛

小学五年生の部

最優秀賞 …… 15
『「福祉」という言葉から学んだこと』
翔南小学校　比嘉　杏華

優秀賞 …… 17
『誰もが安心した生活を送れるように』
翔南小学校　大城　心美

佳作　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
『南風原町の幸せ』
翔南小学校　野原　よつ葉

小学六年生の部

最優秀賞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
『ぼくの弟』
南風原小学校　仲間　一葵

優秀賞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
『福祉についてわかったこと』
翔南小学校　小渡　虎雅

佳作　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
『福祉について』
翔南小学校　幸地　麻鈴

中学一年生の部

最優秀賞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
『私のおばあちゃん』
南風原中学校　城間　璃子

優秀賞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
『「住みやすい町」と福祉』
南風原中学校　安慶田　翔子

応募作品16作品

小学四年生の部　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

講評

南風原町福祉作文コンクール作品

選考委員長　照屋　静江

第７回南風原町社会福祉大会開催の事業の一環として実施された今回の福祉作文コンクールには町内小中学校から多数の応募がありました。どの作品も福祉に対する理解を深める内容になっており、福祉教育が児童生徒の中に身近なものとして浸透していることに嬉しく思います。

入賞作品には、すべての人が幸せに暮らせる社会にするために必要なことは福祉であると受けとめ、ゴミ拾いや募金など自分にできることを実践していることや体の不自由な祖母のためにバリアフリーや車椅子を見つけて利用し、家族みんなが前向きに暮らせるように実践しているなど心を打つ作品がありました。また、障がい者施設での体験を通して、障がいのあるなしに関係なく平等に幸せに暮らせる社会、それぞれが幸せを感じられる社会こそ大切だとして、互いに助け合っていく事の大切さを学んだ作品もありました。

そのほかにも障がいをもつ弟への愛、家庭の温かさ、優しさにあふれ、生命の尊さ尊厳を感じさせる作品、祖母の特性を受けとめ寄り添う中で、心の健康と体の健康を取り戻すことにつながったという作品などがありました。相手の立場に立って行動する姿勢から思いやりのある豊かな心がしっかりと育っていることに感動を与えてくれました。

審査していく中でひと工夫が望まれる点もありました。児童生徒の福祉教育のねらいは知識として理解するだけでなく、ともに助け合い支え合っていく豊かな心を育み実践力につなげていくことです。「総合的な学習」で講話を聞いたり調べたり体験したりして学んだことをどのように理解し実践につなげていくかまで発展させていくより、多くの幸せな暮らしを実現できると考えます。次の機会にはこのような作品に数多く出会えることを期待したいと思います。

最後になりますが、応募してくださった児童生徒のみなさん、指導をして下さった先生方や保護者の皆様に感謝申し上げ講評とします。

小学四年生の部　最優秀賞

『わたしに出来る事』

津嘉山小学校　四年　嘉手納　桜咲

わたしは、４年生になって、総合的な学習の時間で、「福祉」について学びました。そこで、「福祉」とは、「ふだんのくらしのしあわせ」だということが分かりました。

「しあわせ」は、一人ひとり感じ方がちがいます。

わたしにとっての「しあわせ」とは何か考えると、お家があって、家族がいて、毎日学校にも行って、お友だちと楽しく話をすることが「しあわせ」だと感じています。

次に、「ふだんのくらし」とは何か考えてみました。わたしが感じた、「しあわせ」と同じように、家族がいて、友だちがいて、毎日を楽しくくらせることだと思います

またそれを、みんなが出来る社会をつくることが大切だと考えました。そのみんなとは、耳が聞こえない人や目が見えない人、体が不自由な人などもふくめ、地球に住む全ての人です。みんながふだんのくらしをしあわせに出来るようにするために、わたしに出来ることは何か考えてみました。

まずは、しかく障がい、聴覚障がい、身体障がい、高

齢者などについて理かいすることです。理かいすることで、町にある点字ブロックに障がい物が置かれていた場合、それを拾ってい動させるという行動につながります

実さいにわたしは、点字ブロックではないけれど、学校から家までの道のりで、ゴミが落ちていたら拾い、お家まで持ち帰り、ゴミ箱にすてています。これも、住みやすい町づくりの一つだと思い、取り組んでいます。ゴミのない町だと、わたしだけではなく、みんなもうれしいし、幸せな気持ちになれると思うからです。

他にも、わたしに出来ることはないかと考えてみました。それは、「赤い羽共同ぼ金」です。わたしが少しでもこの「赤い羽共同ぼ金」に協力することで、まずしい人や今、苦しんで困っている人のためになると思っています。

初めは、「福祉」について分からないことが多かったけど、こう話やじゅ業を通して勉強することで、わたしでも出来る事があると知りました。また、ふだんからやっていることが「福祉」に関わっているということも分かりました。わたしたち一人一人がしあわせのことを考えて、それを行動にうつすことが大切な事だと思うので、わたしはこれからも続けていきたいです。

小学四年生の部　優秀賞

『おばあちゃんとバリアフリー』

北丘小学校　四年　森田　桃李

ぼくのおばあちゃんは、20年前にたおれて、右手と右足が不自由です。だから、つえを付いてあるいています。

一緒に出かける時は、体の不自由なおばあちゃんのために、色々と考えています。

例えば、階だんのない所やエレベータがある所、トイレの場所をさがします。おばあちゃんは、とても歩きづらそうなので体が不自由だと大変だなと思いました。おばあちゃんがつかれるとぼくのお母さんは車いすをかしてくれる所からかりてきます。それを見て、ぼくは便利だし、おばあちゃんだけではなく、ぼくたち家族も助かるなと思いました。また、障がい者用のトイレも広く作られていて、車いすが入っても使いやすいです。こういう場所がふえて、体の不自由な人たちが生活しやすくなるといいなと思います。それは「バリアフリー」と言うんだよとお母さんが教えてくれました。

障がいとなるかべを取りのぞき、生活しやすくなることを意味します。お年よりや障がい者だけではなく、全ての人にとって日常生活がしやすくなります。そこでぼくは、お母さんとよく買い物へ行く南風原ジャスコバリアフリーを調べて見ました。一番最初に目についたのは

障がい者やにんぷさん用のせん用のちゅう車場があることです。出入り口が近くべんりだなと思いました。次に店内にはだん差がなく歩きやすいです。トイレは、各階に障がいしゃせん用があり、広く作られています。エレベーターには、おすぼたんの所に目が不自由の方のために点字もされています。ぼくが一番おどろいたのは、車いすの方せん用のショッピングカートがあることです。そのカートを車いすの前に合体できるように作られていてよく考えて作られているなと思いました。

よく行くお店でも色々と調べて見るとたくさんの工夫がされていて、とても勉強になりました。その中でぼくが一番思ったことは、体の不自由な方たちの気持ちになって思いやりを持つことが大切だと思いました。

その思いやりの目線で障がい者の方が日常生活がしやすくなる用に作られたバリアフリーはすばらしいと思います。

ぼくは、おばあちゃんと色々な所にたくさんお出かけしたいなと思います。そのためには、おばあちゃんの手助けになれるようこれからも色々な場所のバリアフリーを調べたいと思います。

小学四年生の部　佳作

『高齢者という名の上昇気流』

津嘉山小学校　四年　阿部　純華

みなさんは高齢者と聞いて、どういう印象を抱きますか。

私が最初、高齢者と聞いて思いうかべたのは、つえをついて腰が曲がり、私たちが手をかすべき方々で、彼等から私が助けてもらうことなど考えたこともありませんでした。けれど実際は、私の想像とはちがった高齢者の方々にたくさん出会いました。

私は一年生のころ、父の転勤で岩手県の学校に通っていました。初めてのスクールバスは楽しみやきんちょうで胸がいっぱいでした。学校の帰り、スクールバスに乗りこみ、まだ慣れていない土地をながめていると、見た事があるような仮設住宅が目の前に現れました。高学年のお兄さんやお姉さんが何名かバスを降りたので、つられて私もバスを降りてしまいました。ところが待っているはずの母の姿がどこにもなく、私一人がぽつんと取り残され、バス停を間ちがえたと気付いた時には、もうおそすぎました。知らない土地で不安になり、泣いていると、近くの家の中から、高齢者のおばあさんが、

「どうしたっけか。」

と優しく話しかけてくれました。事情を説明すると、

「泣くなじぇ。電話してみろ。」

と言って、電話をかしてくれました。そのおかげで無事家に帰ることができました。あの時、あの優しいおばあさんから、親切にするという事を教えてもらいました。また、私たちが登校する際、安全に学校に行く事ができるように、毎朝見回りや交通ゆう導をしてくれている高齢者の姿を見ました。知らず知らずのうちに顔も知らない高齢者の方々に見守られながら、日常をすごしている事に気が付きました。たくさんの高齢者の方々の優しさや思いやりに助けられながら、私たちの住む社会は成り立っているのです。

昔は十人で一人の高齢者を支えていたけれど、私が大人になるころには、一人で一人の高齢者を支える肩車社会になるであろうと言われています。正直、一人でちゃんと一人の高齢者を支えきれるだろうかという不安はあります。しかし高齢者の方々も、私たちの生活を支えてくれているので、私も大人になったらおん返しができる人になりたいと思います。イギリスの詩人である、ウィリアム・ブレイクは、「自分の翼だけで飛ぶなら、鳥は高く舞い上がることはできない。」と言っています。つまり人は一人ではなくそこにだれかの助けがあるからこそ、生きていけるのだと考えます。

きっと、私たちは、高齢者という上昇気流のおかげでどこまでも高く飛べているのです。

小学四年生の部　佳作

『福祉とおばあちゃん』

津嘉山小学校　四年　兼島　悠來

わたしは、学校のじゅ業で、福祉について勉強して福祉とは「ふだんのくらしのしあわせ」を実げんすることだと知りました。

ユニバーサルデザインやバリアフリーについても勉強しました。バリアフリーとは、バリアはかべでフリーは自由な人のために、あることを知りました。

わたしの、身の周りには、手すりやスロープが、お店の出入口にあります。お店の中には、エレベーターやピクトグラムが、あります。目が不自由な人には、点字ブロックがひつようです。なぜなら、目が見えない人にもまよわずに、目的地に着くことができるからです。

わたしのおばあちゃんは、目の病気で目が見えませんおばあちゃんの家の中の階だんには、手すりがありました。福祉の勉強をしたので、おばあちゃんの家にある手すりが目の不自由なおばあちゃんのためだとわかりました。パソコンや洗たく機のボタンに、点字シールもはってあります。これは、目の見えないおばあちゃんが正しくき機を使うためにあります。

おばあちゃんは、同行えんご支えんを使ってヘルパー

さんをよぶこともあります。一人では、外を歩けないからです。ヘルパーさんといっしょに、お買い物や病院、体そう教室に行きます。

また、おばあちゃんは、デイジー図書を使っていて、これも福祉になります。おばあちゃんは、テレビや本が見れないので、デイジー図書を使って、読みたい本が聞けるシーディーを借りて、耳で楽しんでいます。

おばあちゃんは、お父さんやおじいちゃん、ヘルパーさんに助けてもらっているから困っていることはないと言っていました。それは「ふだんのくらしのしあわせ」が心にあるからだと思いました。もし、福祉がなくてヘルパーさんがよべなかったり、おじいちゃんやお父さんの助けがなかったりしたら、おばあちゃんが幸せにくらすことができないと思うので、福祉は大切だと感じました。

もし、わたしのクラスに目が不自由な人がいたら、教科書が読めないので、わたしが読んであげたいです。い動するときは、わたしがヘルパーさんのかわりになっていっしょに行動したいです。

これからも、福祉について勉強をして、おばあちゃんや体が不自由な人のために、手助けをして「ふだんのくらしのしあわせ」を目指したいです。

小学四年生の部　佳作

『ひいおばぁちゃんの笑顔』

北丘小学校　四年　宮城　昊愛

わたしには、九十三才のひいばぁちゃんがいます。ひいばぁちゃんは、たくさん話を聞かせてくれたり、毎回「アイスクリーム食べて」とおこずかいをくれます。昨年からコロナ感染症予防のため、会うことができず元気でいるか心配でした。

夏休みのある日、ひいばぁちゃんがお風呂に入れないとわたしの母に連絡がきたため、ひいばぁちゃんの家に行きました。ひいばぁちゃんはいつも通りの笑顔でわたしをむかえてくれました。ひいばぁちゃんは足に力が入らず転びそうになったり、物わすれや同じ事をくり返し言ったり、わたしの名前もわすれていました。大きな声で耳元で話さないと聞こえません。一年前までは、近所を散歩したり、物わすれもなく元気だったので悲しく心苦しいです。でもお母さんから、老いによるものと教えてくれ、気持ちが和らぎました。

し設はいかず自宅でくらしています。歯がないため食事の内容は、やわらかめで、プリンやゼリーのようなかたさの食事を食べています。トイレはおむつパンツを使用しています。お風呂はお母が手伝って入っていました お風呂にはひいばぁちゃんが入りやすいように手すりやかいご用のいすがあり転ばないようにつくられていまし

た。お風呂の後は「ありがとう。気持ちよかった。」と笑顔で言っているのを聞いてわたしもうれしくなりました

ひいばぁちゃんは、いつも笑顔でいっしょにいるとしあわせな気持ちになります。

笑顔はまわりみんなをしあわせな気持ちにしてくれる、とってもステキなことだと思います。ひいばぁちゃんがわたしは大好きです。ひいばぁちゃんは、わたしが帰る時、「またいつでも遊びにおいでよ。」と言ってくれます

わたしもひいばぁちゃんに

「また遊びに来るからね。」とかならず言います。

ひいばぁちゃんにもっと長生きをしてもらってたくさん話をしたり、いっぱい遊んだりしたいです。

高れいになると体が弱ってきて思うように動けず、にんちしょうになると人の手助けが必要だと分かりました。人と人とが支え合うことや生活しやすいかんきょうをつくっていくことが大切だと感じました。わたしも、こまっている人がいたら手助して人のために役立ちたいです

小学五年生の部　最優秀賞

『「福祉」という言葉から学んだこと』

翔南小学校　五年　比嘉　杏華

「福祉とは何だろう。」

私は、老人や障がい者の介ごをするためのし設などのことをまとめていうことが福祉だと思っていました。それだけかなと思いもっと福祉のことについて調べてみました。

福祉というと、高れい者や障がい者を対象にした何か特別なことのようにも思われているようですが、「福祉」とは、「幸福」と同じ、「幸せ」という意味の言葉だと分かりました。

障がい者と自分達は平等で、どちらも、「幸せ」でいるために、よりよい生き方をする必要があると知りました今まで私は、障がい者や、老人、お年よりは違った暮しをしていると思っていたけど、そうではなく、同じ暮しの中で必要な助けを受けて生活しているんだと思いなおしました。

私の母は障がい者し設で働らいており、三年生の時、お母さんの仕事場に行って箱づめのお手伝いをしたことを思い出しました。その時、手の不自由な人も、使える手で作業をしていたり、皆がんばって一緒に作業をして

いました。その時は、自分の方ができる事もたくさんありましたが、とてもおどろいたことがあります。目が不自由な人は、耳が聞こえるから、箱づめの方法を教えてもらいながら、手と耳をがんばって使って作業してたり耳が聞こえない人は、手順を目で見ながら、まねして作業していました。私がやり方を教えてもらって、箱づめをしてみると、とてもむずかしかったです。順番をまちがえると、失敗してしまって大変でした。それなのに、失敗している人が少なったので、一緒に作業している人達のことをとてもすごいと思いました。みんなと一緒に話しながらできたのでとても楽しかったことを今でも覚えています。

目が見えない人や耳の聞こえない人に実際会うと、目や耳が不自由な人は、今まで大変な思いもしてきたことがないのかとぎ問に思いました。それから色々調べてみると、手話や、点字ブロックがあるから、自分達と同じ生活をすることができているということが分かりました

もし、自分が耳が聞こえなかったり、目が見えなかったら皆と違ってきっと大変なことも多いけど自分だけが楽しく思えることや、おもしろいと感じるものももしかしたらあるかもしれないと思いました。

それぞれ「幸せ」のために、障がいをもつ人も、私達も助けあって暮していくことが大切だと思いました。そのために、みんなが相手のことを思い合って幸せ生活していければいいなと思いました。

小学五年生の部　優秀賞

『誰もが安心した生活を送れるように』

翔南小学校　五年　大城　心美

私にはいとこに双子の姉妹がいて、二人は生まれた時の体重は、６００グラムにもみたなかったそうです。早産で生まれたため、のうに障がいでき、６ヵ間保育で育ったそうです。今でも自分で歩くことも、ご飯も食べることもできません。

現在二人共、十才で私より一つ下の四年生です。二人は、養護学校に通っていましたがコロナのえいきょうでなかなか学校にも行くことができなくなったので、最近は児童デイサービスを利用しているそうです。

そのことを聞き、私はいとこの通う児童デイサービスについて知りたくなり調べてみました。児童デイサービスは、利用者の自立のために必要な知識、コミュケーションスキル等を習得するための支援や、操作活のほ助指導などを行います。また地域の行事への参加や、社会科見学など施設外での支援も行っているそうです。二人は歩くことがむずかしいので、下校時に養護学校から施設までおむかえに行き、施設から自宅へ送迎があるそうです。また休日は自宅から施設間を送迎することも行っていると分かりました。このような児童デイサービスのおかげでとても助かっていると分かりました。

調べていく中で、私がびっくりしたことがあります。それは、双子の姉妹が利用しているデイサービスは、双子保護者がふたんをへらし、少しでも家事の軽減のために、双子姉妹の専用の食事を作って、弁当にして持たせてくれていると聞きました。双子姉妹のお母さんは、自宅で作ると、時間もかかり大変な食事が、デイサービスのおかげで、とても助かっていると話していました。

私は、デイサービスを利用している双子姉妹だけではなく、その家族みんながデイサービスに支えられて暮していることを知り、私達と同じように安心して生活ができていると思うととても嬉しくなりました。そのことをお母さんに話すとこんな言葉を教えてくれました。

「ふだんの暮らしを幸せに」という頭文字をとると、福祉という言葉になるということです。

この言葉のように、障がいをもつ人がこれからも安心して生活することができるように私も支える人の一人として、自分にできることを考えて行動していきたいです

小学五年生の部　佳作

『南風原町の幸せ』

翔南小学校　五年　野原　よつ葉

私のおじいちゃんは、デイサービスにかよっています なぜならおじいちゃんは、足もすこし悪いし、家に人がいないからです。日曜日以外は毎日デイサービスに行って夕方に帰ってきます。朝、おむかえの人がおじいちゃんに大きな声で

「おはようございます。」

と言います。それを聞いたおじいちゃんも

「おはよう」

と言います。それを聞いたら私も安心して、笑顔になります。私が、将来おばあちゃんになって、目や足や耳が悪くなってデイサービスにかようことになったらきっと安心すると思います。理由は、おじいちゃんも不安なくやっているからです。

四年生のころに私たちは、アイマスク体験と車いす体験をやりました。アイマスク体験では、ペアの人に左だよとか右だよ、とかいっぱい言われてとても安心してできました。

年をとって目が悪くなった人の気持ちがすこし分かったように気がしたので良かったです。それにその人がど

れだけ安心しているかということもわかって良かったと思いました。

車いす体験では、だんさなどの所がとてもむずかしかったけど、おばあちゃんやおじいちゃんをかいごしている人のことを考えたらしっかりとできたので良かったと思いました。

この、車いす体験やアイマスク体験をして私は、おばあちゃんたちのことをかいごしている人はどれだけ大変なのかということがわかったし、その人たちがいるおかげで、老人の人たちはケガをしないで元気で生きているということがくわしくわかりました。

私は、自分が認知症になったらとてもこわいと思いました。理由は、自分が知っている人が分からなくなったり、ご飯を食べたのに食べてないというところがこわいと思いました。四年生のときに認知症のことを学習しました。そのときに、認知症がどれだけこわいかということが自分が知っていた以上だったのでビックリしました私の回りにも認知症の人がきっと出てくると思います。そのときは、優しくせっしてあげたいと思いました。

今の南風原町は、老人に優しい人がいっぱいいるので私もその人たちみたいに老人に優しい人になりたいと思いました。

小学六年生の部　最優秀賞

『ぼくの弟』

南風原小学校　六年　　仲間　一葵

ぼくは、障がいがあることで、うまく会話をできなかったり、自分で食べることが出来ない人に対して優しくせっすることが大切だと思います。ぼくには七才の弟がいます。その弟は、心臓、脳、他にも色々な重度の障がいを持っていますが、人に笑顔をあたえるのでとてもかわいいです。

弟は、朝起きると、お母さんに浣腸をしてもらい排便をします。そして入浴をして、朝ご飯を食べます。今年小学校に入学したので、日中は学校ですごしています。帰宅して、体を休めて、家族が帰ってくると夕食をとりねます。これが弟の今の日常生活です。

こんな弟ですが、これまでに三回命を落としかけています。一度目は、生まれたときです。命があやういじょうきょうということできんきゅうていおうせっかいで生まれました。その後、きんきゅう手術が行われて、一命を取り留めましたが、その後、お父さんが別室に呼ばれて、医者から、「三日程度しかもたないと思います。」といわれたそうです。二度目は、二才の時に肺の動脈が詰まりかけ、全身の血流が悪くなり、手術をしました。三度目は、二才のときに、三十分以上けいれんが続き、救急車で病院に運ばれました。そのたびにＰＩＣＵ(小児集

中治療室)に入り、長いときは、約半年も入院しました。入院している時は、弟に付きそったお母さんに会えず、家の中は、父とお兄ちゃんとぼくの三人で、すごしました。さみしかったです。

ぼくから見た弟のいいところは、そこにいるだけで周りのみんなを元気にさせたり笑顔にさせたりしてくれるところです。弟は、自分で歩けないし、自分で食べれないし、会話ができないので、いたいことや、いやなことも伝えられません。でもいっしょうけんめいにがんばっている弟がいるだけで家族みんな幸せになれます。弟が一年生になってうれしかったことは、いっしょに宿題ができたことです。分散登校の時に、タブレットを使っての宿題を、弟に教えることがありました。タブレットをさわり喜んでいる弟を見て、「かわいいな〜」と思いました。弟のような障がいをもっている人に優しくせっすることが大切だと思います。それは、トイレにいけなければ手伝ったり、目が見えない人には、手をさしのべて行きたいところまで連れていったりすることです。これからもこの気持ちをわすれずにせっしていきたいです。

小学六年生の部　優秀賞

『福祉についてわかったこと』

翔南小学校　六年　小渡　虎雅

ぼくは、４年生の時に総合学習ので福祉について学びました。それまでは、福祉という言葉を聞いたことがありませんでした。

その学習で一番心に残っていることは、点字でした。初めて知った時に、

「この点は、何に使うのだろう？」

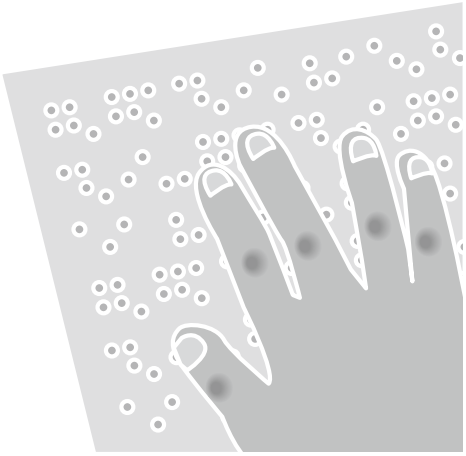
と思いました。最初は、まったく読み方がわからなかったけど、先生から点字の読み方が書かれている紙をもらってよむことが出来ました。でも、読み方がわかっても実際に触ってみると何を書いているのかわからなかったです。目が見えない人は、いつもこんな難しい点字を読んでいるのかと思うと生活をする中でとても苦労していると感じました。点字を読むためにたくさん努してぼくたちと同じように生活できていると思うと障がいを持っている人の苦労を感じることができました。

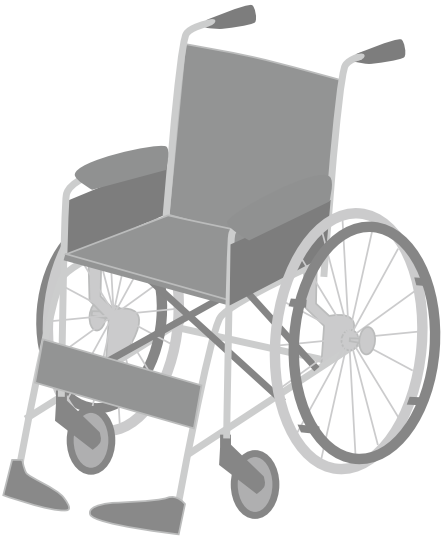
もうひとつの心に残ったことは、車いす体験をしたことです。車いす体験では、実際に車いすに乗っていつも通る道を走らせました。いつもは何も感じない段差でも車いすだと、とても高く感じました。坂道では、意外とスピードが出てちゃんと止まれるか心配になりました。

いつもは、何も感じないことでも足が不自由な人たちや車いすにのっている人たちにとって不便なことが多いことに気づきました。ぼくは、いつもサッカーをしたり鬼ごっこをしたりしていることもありがたく感じました。

こんな体験からぼくは、困っている人や助けを必要としている人を手伝ってあげたり助けたりすることが福祉活動なんだということがわかりました。そして、福祉の仕事は、ぼくたちの知らないところで困っているたくさんの人たちを支えていることもわかりました。

福祉のことがわかったことで車いすの人や困っている人がいたら何かできるかなという気持ちにもなりました福祉について知ることができてよかったです。





小学六年生の部　佳作

『福祉について』

翔南小学校　六年　幸地　麻鈴

私は、福祉について分かったことは、ボランティアの人たちがしょうがいしゃを手助けしていることです。

目が見えない人は、点字で文字や文章を読んでいることと盲導犬と一緒に買い物などをしていることが分かりました。私は、そのことを知って、点字を覚えるのは、大変だと思いました。なぜなら、エレベターや歩道などにある点字を見て私は、何て書いているかが分からなかったからです。

耳が聞えない人は、手話で話したり、ほちょうきを使って会話をしたりしていることをはじめて知って私は、手話を覚えて困った人を助けたいと思いました。

車イスの人は、移動するときは大変だと思いました。その理由は、行きたい場所にだんさやさかがある場合は一人では難かしそうだと思ったし車イスをおしてくれる人がいたほうがいいと思ったからです

パラリンピックの車イスバスケと水泳を見たとき、私は、ぶつかったりして起き上がったこととおいぬかされたりしても最後まであきらめずにがんばっているのを見てすごいなと思いました。なぜなら、私は、おいつけるきょりじゃなかったら、あきらめると思ったからです。

あきらめずにがんばっておいつこうとしても途中であきらめるからです。

また、ユニバーサルデザインについて調べて分かったことは、ユニバーサルデザインは、しょうがいがある人もない人も便利でみんなが使いやすい物を作ろうというデザインの考え方だとわかりました。そのことを調べ終わったとき、私は、自分の身のまわりにもユニバーサルデザインがあるかさがしていると二つありました。一つ目は、シャンプーの容器で二つ目は、牛乳です。

バリアフリーについて調べて心に残ったことは、道具やおもちゃにもバリアフリーがあったことです。その理由は、乗り物などにバリアフリーがあることを知っていたけど、道具やおもちゃにもバリアフリーがあることにはじめて知ったからです。

私は、しょうがいしゃの人や困っている人がいたら手を貸してあげたいです。

中学一年生の部　最優秀賞

『私のおばあちゃん』

南風原中学校　一年　城間　璃子

私の身近なお年寄りというと、母方のおじいちゃんとおばあちゃんだと思います。お年寄りといってもまだまだ元気ですが、おじいちゃんとおばあちゃんが、幸せだと思える社会を私なりに考えてみました。

私のおじいちゃんとおばあちゃんは、自宅近くで二人で暮らしをしています。おじいちゃんは元気ですが、おばあちゃんは自律神経の病気を持っています。どんな病気かというと、急にむしゃくしゃして、物や人にあたってしまう、心の状態が不安定なせいで、だんだんと体調まで不安定になってきました。そんな状態のおばあちゃんのために、私とお母さんは、一週間に最低でも一度は顔を見せるようにしています。

おばあちゃんは、私達母娘が来ると、必ずおいしいご飯を作ってくれます。ソーキソバアーサのみそ汁、チャンプルー料理と行くたびに多様な沖縄料理が出てきます。おばあちゃんにとって、子どもや孫が、ご飯を食べている姿を見ることが楽しみの一つになっています。

もともとおばあちゃんは、とっても明るくて、笑顔が絶えない人でした。生け花や植物を好み、おしゃべりが大好きで、小さい頃の私は、おばあちゃんの話を聞くだ

けで、幸福感に包まれたふわふわした心地よい気分になりました。そんなおばあちゃんが、本当に大好きでした

以前、おじいちゃんがベランダに好き勝手に物を置いて、おばあちゃんが怒ってしまいベランダに置かれた植木鉢を投げてしまったことがありました。普段の穏和なおばあちゃんからは、そんなことは想像できませんでしたが、これまでの積もり積もった何かがあったのか、感情を爆発させてしまったのでしょう。この出来事をきっかけに、おばあちゃんの心が不安定になってしまいました。

お母さんが、そんなおばあちゃんの様子を見て、家に連れてきました。おばあちゃんが家に来た翌日、お母さんもお姉ちゃんも仕事で家にいないので、おばあちゃんと私、二人で過ごすことになりました。二人きりでしゃべるのは本当に久しぶりだったので、少し緊張してしまい、しばらく沈黙が続きました。すると、おばあちゃんが急に泣きだしました

「え…。どうしたんだろう…。」

いつも明るいおばあちゃん。笑顔がすてきなおばあちゃん。そばにいるだけで暖かいふわふわした気持ちで包み込んでくれるおばあちゃん。そんなおばあちゃんしか知らなかった私は、驚きとともに少しショックを受けてしまいました。泣いているおばあちゃんの姿を見て、私は初めておばあちゃんの病気を実感しました。

私は、幼いながら自分のできることは何かを考えました。まずは、おばあちゃんの気持ちに寄り添うこと、そしておばあちゃんが喜ぶことをしようと思いました。おばあちゃんの作るご飯を一緒に食べたり、他愛もないおしゃべりをする時間を作るようにしました。時間をかけて少しずつ、おばあちゃんが笑顔になることを考えながら過ごしていくうちに、体は調子を取り戻しました。気持ちが安定すると、体を健康になるのか、前の元気で明るいおばあちゃんに戻りました。

私はこれまで、病気は悪い所を治せばいいと思っていました。しかし、この経験で感じたことは、心の健康が体の健康と繋がっていて、心が健康であれば、体も健康になることがあるということを知りました。

今、日本は超高齢化社会だと言われています。医療技術が発達し、寿命が延びて長生きできる人が増えています。でも、心と体が不健康なままで、長生きしても幸せではありません。どんなに年を重ねても、幸せを感じられる環境を周囲の人がつくってあげることが大切だと思います。

おばあちゃんやおじいちゃんが求める幸せは、難しいものではありません。子どもや孫がいつまでも元気で笑っていられること、そんなあたりまえの日常を望んでいるのです。

いくつ年を重ねても、そんなあたりまえの日常の中に、温かい幸せを感じられる社会になって欲しいです。

中学一年生の部　優秀賞

『「住みやすい町」と福祉』

南風原中学校　一年　安慶田　翔子

福祉…多くの人々の幸せ、幸福

そもそも福祉って何だろう？と思って、私が国語辞典で調べると、こう書かれていました。

私は、学校の総合学習で「自分の住んでいる町を『住み続けられる』町にするにはどうすればいいか」という事を様々な視点から考えています。その中には、「福祉」も入っていました。

最近よく耳にする「ヤングケアラー」や「老人介護」「コロナウイルスワクチンせっしゅ」それらの全てに「福祉」が関わっていました。このことから、私は「住み続けられる町づくり」には福祉が強く関係しているのではないだろうか、と思いました。

南風原町のホームページを見て調べてみると、思った通り、「福祉」という文字が見つかりました。あれ…？福祉のそばに、もう一つ。何かが書かれています。「健康福祉課」南風原町では健康と福祉を同じ課で支えていたのです。確かに、と思いました。健康があってこその、福祉。幸せをつくるために、健康を支える。考えてみればこの二つは強いつながりを持っているな、と感じました

私の住んでいる町である南風原町では、特に老人と子供に対する健康福祉関連の支援が充実しているな、と感じます。

たとえば、町の公共施設であるちむぐくる館では、高齢者の運動できるスペースを使ったりして心身ともに支えています。また、子供の医療費も負担してくれるため金銭的にあまりゆとりがない家庭でも、子供の健康を守ることを町が支えてくれます。その他にも、たくさんの取り組みをその状きょうに応じて対策してくれるため、町民一人一人の福祉を支えてくれます。

最近の事柄だと、やっぱりコロナウイルス対策です。家庭、学校、買い物など。生活の中でできるだけマスク着用が呼びかけられる昨今ですが、中には事情があってマスクがつけられない人もいます。そんな人のために南風原町が配布した「マスクがつけられない」ことを示すバッチ。南風原町の広報で見たとき、すごいな、と思いました。

過半数を占める人だけではなく、このような取り組みを必要としている人にとっても暮らしやすい町にするためには、少数派の意見にもしっかり耳をかたむける。町全体が思いやりを持ってこそ考えられ、考えるだけでなくすぐに実行できたんだと思います。

町全体でないと実行できない大きな取り組みは、コロナ対策以外にも、暮らしに関わる事で多くあります。「ヤ

ングケアラー」「児童ぎゃくたい」などは子供達の身近にいないとなかなか苦しんでいる様子、大変そうな様子に気付くことができません。

児童ぎゃくたいなどの問題は、起こる前に防ぐ事が大切です。ヤングケアラーの子供には、誰かが察知して負担を軽くしてあげる必要があります。

しかし、こういった「子供」が苦しんでいる事例は、あまり察知されにくいのが現状です。町でこういった問題を大きく取り上げて多くの対策をしているところはあまりありません。市や村でも同様にだと感じます。

今後の「住み続けられる町」づくりでは、次世代をになう子供達への支援を、医療関係だけではなく、暮らしや安心できる環境をつくる事にも幅を広げないといけないのではないか、と感じました。

しかし、このような課題はなかなか改善しにくいのが現状です。しかも最近はコロナウイルスの影響もあり、住民の暮らしにまで目を配れるかも分からないようなじょうきょうです。だからこそ、私達住民が地域とのつながりを深められる機会でもあると思います。

町の取り組みだけをあてにせず、私達住民同志がつながって一人一人が町づくりにこうけんできる地域。それは、私達があいさつし合ったり、助け合って行動するだけでもつくっていけると思います。

「住み続けられる町」と「福祉」は思いやりの心と地

域とのつながりでさらに良い方向に進めていけると思います。

そして、私達子供でも地域、そして地域の福祉のためにできる事はあると感じます。みんなで福祉をつくっていくために、今日も私は勇気を出して…

「おはようございます！」

小学四年生の部

『「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせに』

北丘小学校　四年　崎山　花梨

福祉は、「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせにという言葉の頭文字をとった言葉です。そして、福祉は誰にでも出来ます。なぜ福祉は誰にでもできるのでしょうか

福祉はむずかしそうなイメージがありますが、かんたんなことです。電車でお年よりに席をゆずったり、公園などのごみ拾いをするのも福祉です。また、社会福祉士や介護福祉士など、福祉の仕事もあります。このように福祉は誰にでも出来ます。

次に、福祉はいつごろからあるのでしょうか。福祉は江戸時代以降からあると言われています。

次に福祉の漢字の意味です。どちらの漢字も「幸福」や「しあわせ」を意味する漢字です。福祉は短い言葉なのに、いろいろな意味を持っているということが分かりました。これからは、障害者にあったら歩くのを手伝ってあげたりしたいです。福祉について考えたら、「人は協力しあって、生きてるんだなー」と、思いました。

また、江戸時代以降から福祉が受けつがれてきていることがとてもすごいと思いました。これからも、福祉が受けつがれていけるように、ごみを拾ったり何か協力できることはやっていきたいです。

小学四年生の部

『幸せにくらすために』

北丘小学校　四年　長浜　叶和

今年の夏は、東京オリンピック、パラリンピックがありました。オリンピックでがんばっている選手のすがたをみて、すごいなと思いました。その後のパラリンピックでは、選手がいろんなしょうがいがある中で戦っていました。目が不自由な選手や手足が不自由な選手など様々です。

ぼくは、四年生の総合的な学習の時間に、「福祉」について勉強しました。パラリンピックを見てもっと、福祉について調べてみようと思いました。

タブレットを使って調べたり、お父さんやお母さんに話を聞きたりしました。

福祉とは、人の「しあわせ」、ふだんのくらしのしあわせで、人が「より良く生きること」書いてありました。

体にしょうがいがある人たちが、より良く生活していくためどんなことがあるのかを調べてみました。耳、目手足にしょうがいがある人の生活方法についてです。

おもに耳の不自由な人が手や指、口の動きを使って話をするための手話という方法があります。五十音やアルファベットは、指を使って表します。フランスのド・レペ神父を世界で初めてパリろうあ学校をせつ立したこと

をきっかけに手話が少しずつ広まっていったそうです。

盲どう犬は、目の不自由な人の歩行の大切なパートナーです。目の不自由な人が歩くときは、白いつえか盲どう犬育成しせつで訓練した盲どう犬を連れることが法りつでみとめられています。盲どう犬には、白または、黄色のハーネスを付けることになっています。使用者は、ハーネスをにぎってい動し、盲どう犬は、使用者の指示を受けながら目的地まで安全にゆうどうしてくれます。目が不自由な人にとって盲どう犬は、大切なそんざいです。

また、点字や道路にある点字ブロックも目が不自由な人には、大切なものです。ぼくの住んでる南風原町にも点字ブロックや音のなる信号機があります。

他にも体にしょうがいがある人や高れい者などが生活しやすくするバリアフリーもあります。

調べてみて分かったことは、しょうがいがある人でも手話や盲どう犬や点字バリアフリーなどを使うことで、ふだんのくらしをしあわせよりよく生きることができるんだと思いました。

ぼくも困っている人がいたら進んで助けてあげたいと思いました。これから他にどんなことができるか考えていきたいと思います。

世界中の人が幸せにくらせるように・・・。

小学四年生の部

『オリンピック、パラリンピックを見て』

北丘小学校　四年　根間　彩寧

私は、初めてオリンピックを見ました。

今年は、コロナで外に出る事が出来なかったので、テレビで見ることができました。

私は、部活をバレーボールをしているので日本のバレーボールの試合を見て、すごいと思いました。みんな一つのボールを追いかけたりするのがかっこよかったです私もたくさん練習して日本一のバレーボールプレーヤーを目指したいです。陸上では、みんなすごく速くてビックリしました。私のお母さんもバレーボール、陸上のせん手だったので、私もがんばって、目指したいです。そして日本は、オリンピックでたくさんメダルをとっている人がいて、すごいと思いました。

また、パラリンピックのせん手は、すごいなぁと思いました。なぜなら足が、不自由な人のきょう技では、片方の手は、車いすを動かして、片方の手で、ボールなどをなげたり道具を持ったりしていて感動しました。

目が見えない人も、見えていないので、ボールを動かしたりしていて、私は、すごいなと思いました。どんなに身体が不自由でも目ひょうに向かって、けん命に努力

することのすばらしさに感動しました。きっとたくさんの苦労があったと思います。それを乗りこえてメダルはとれるのは、すごいと思います。

五体満足に生まれたありがたさを、すごく感じる気がしました。

また次のオリンピックやパラリンピックも見ようと思います。そして、障害を持った人には、「がんばれ」と声をかけたいです。

小学四年生の部

『ぼくのアイマスク体験』

北丘小学校　四年　宮城　宙弥

「目が見えないって不安だな。」

ぼくは学校の授業でアイマスクの体験をしました。

アイマスクを付けた時は、何も見えなくていつもいる教室なのに自分がどこにいるのか分からなくて、つくえにゴンゴンあたってふべんだと思いました。また、段をのぼったりした時にとてもこわくて、かい助をしてくれる友達のかたをつかんで歩くことで安心できました。

自分は、アイマスクを付けた時は周りが見えなくてこまっているのに目が見えない人はみんなとちがって歩くのが大変だったり、車の運転ができなかったりおふろも一人では入れないし足元が見えないからぼうも使わないといけない生活でたいへんだなと思いました。目が見えない人がいたら声をかけてあげたり一人で遊んでたらいっしょにできることをしたいと思います。

この体験を通して、今まで気づかなかったことに気づき、大切なことを学ぶことができました。これからは、ぼくにできることを考えて、行動します。

小学四年生の部

『パラリンピックを見て思ったこと』

北丘小学校　四年　屋嘉　陽彩

わたしは、パラリンピックについて考えました。

まずは、パラリンピックで行われた２つのきょうぎについて説明します。

一つ目は水泳です。水泳は手や足にしょうがいをもった選手、しかくしょうがいの選手、知的しょうがいの選手が出場していました。

しょうがいでも人それぞれ種類はちがうため、あらかじめクラス分けされた中でタイムをきそい合います。そして、足にしょうがいをもった選手は水中からのスタートがみとめられており、しかくしょうがいの選手はコーチがタッピングバーとよばれるぼうでかべが近づいていることを知らせることができます。タッピングバーがあるのでしかくしょうがいの選手は安心して泳げるということが分かりました。そして、足にしょうがいをもった選手は手の力だけで泳いでいるのですごいと思いました

二つ目はブラインドサッカーです。しかくしょうがいのある４人のフィールドプレーヤーとしょうがいをもっていないか、じゃくしというしょうがいをもったゴールキーパーの５人のチームでたたかいます。しあいの時間は前半20分、後半20分の計40分でフットサルと同じコートで行われます。しょうがいのてい度を公平にする

ためにフィールドプレーヤーは、アイマスクをつけますゴールキーパーはつけません。アイマスクをつけていますが、まるで見えているかのようにボールをあやつり、ゴールをねらいます。ボールをうまくあやつれるひみつは、音と声です。ボールの中にすずが入っており、転がると音がなるようになっています。選手はその音で位置やスピードをはあくします。味方の声もじゅうようで、かんとく、ゴールキーパー、相手のゴールのうらに立っているガイドの声をたよりに選手は動きます。なので、音と声がとても大切です。私はテレビでブラインドサッカーを見ましたが、目が見える選手でもゴールをきめるのがむずかしいのですが、ブラインドサッカーで何回もゴールをきめていたので本当にすごいと思いました。そして、私はブラインドサッカーを見てて、

「本当にアイマスクをしてるの？。」

と思うぐらいすごかったです。

わたしは、パラリンピックを見る前までは、しょうがいをもった人はわたし達からしたら、かんたんなことができなかったりして、大変なことがたくさんあると思っていました。でも、それだけではないと、気づきましたなぜかというと、わたし達には出来ないことをやっていたからです。しょうがいをもってる、もってない関係なく、だれもが活やく出来るところがあると、私はパラリンピックを通して、気づくことが出来たので、パラリンピックがあってよかったと思いました。

小学四年生の部

『福祉について考えよう』

翔南小学校　四年　上原　希朋

わたしは、総合の時間に福祉について学びました。まず福祉というのは、人々が安心してくらせるように作られたもので「ふだんのくらしをしあわせに」という意味です。わたしは、わたしが調べたことを四つしょうかいします。

一つ目は、目が不自由な人です。そのような人たちは音でききわけているのです。そのほかには、本を読むことができません。そのとき、目が不自由な人は、点字を使ってよんでいます。点字は、たてに三つ、よこに二つというようにならんでいて、「あ」の場合だと、左がわの上から一ばんめの所に点をつけて、これで「あ」と読みます。目が不自由な人は、白杖を使っています。白杖は白・黒・赤の3つの色のぼうです。それをつかって、きけんな場所をさがして、きけんをさけているのです。

二つ目は、耳のきこえない人です。耳のきこえない人は、相手の言いていることがわかりません。その時、耳の不自由な人は、手話を使って会話をしています。手話は、耳のきこえない人のためにあります。手をうごかしてあらわすことです。耳のきこえない人は、ほちょうきを使っています。ほちょうきをつけると、音などがきこえます。ほちょうきは、耳のきこえない人がすこしでも

音をきこえるためにつくられたものです。

さいごは、手足が不自由な人です。手が不自由な人はごはんを食べたりすることができません。でも、足をつかえます。足でスプーンを持って、食べることができます。足が不自由な人は、走ったりすることができませんですが、車いすを使うと、移動することができます。パラリンピックの車いすバスケットボールという競技もあります。

このように、障害者の役に立っている福祉ですが、障害者だけでなく、子どもから、高れい者の役にも立っていて、今の世の大切な物となっています。みんなでいろいろな人をたすけあっていい世の中にしましょう。

小学四年生の部

『大切な福祉』

翔南小学校　四年　神里　良唯斗

ぼくは、総合的な学習の時間に「福祉」について学習しています。「福祉」という言葉を国語辞典で調べてみると「福祉」は「すべての人の幸福。人々が安心してくらせるかんきょう。」とありました。

授業のなかで、すべての人にはどんな人がいるのかをみんなで考えました。みんなの意見から大人や子ども、赤ちゃん、高れい者、にんぷさん、しょうがいのある人というのが出ました。そして、しょうがいにもいろいろあって、目の不自由な人、耳の不自由な人、足が不自由で車いすやぎそくを使っている人、知的しょうがいの人などがいることが分かりました。

ぼくがいちばんきょうみをもったのは、目の不自由な人についてです。なぜなら、ぼくは、3月まで東京に住んでいて、東京で駅に行ったら、目の不自由な人をみたことがあるからです。ぼうを持っていて、地面をつつきながら歩いていました。とてもたいへんそうだなあと思いました。目が見えないから、電車に乗るときやおりるときに、だんさがあって足がかかってしまうかもしれないので、見ていてたいへんそうだと思いました。

また、さいきん、東京パラリンピックがあって、見て

いると、目の不自由な人が水泳をしていました。目の不自由な人でも水泳ができるんだなあと思いました。ぼくは、目がみえなくても、水泳にチャレンジしているところがすごいなあと思います。自分だったら、目が見えないと、こわいので、水泳はできないと思います。なのでこれからぼくは、目の不自由な人のくらしについて調べていきたいと思います。そして、目の不自由な人のくらしを調べて目の不自由な人の気もちを考えたいと思います。目の不自由な人達のために、できることを考えてぼくはやさしい気持ちを持って、助けてあげたいと思いました。

小学四年生の部

『ふだんのくらしを幸せに』

翔南小学校　四年　金城　一樹

ぼくは、図書館で手話の本をかりてみました。「全国で約35万人。耳が不自由な人達は昔から周りのじょうきょうを知ることができません。もし、わたしたちが手話を話すことができたら、そんな不安を、少しでもやわらげることができるかもしれないのです。」と本の始めに書かれていました。

この本を読んで、初めて聴覚に障害がある人を聴覚障害者やろう者と言い、それに対して聴覚に障害のない人を健聴者と言うことを知りました。

ぼくは、耳が聞こえて話ができることをあたりまえだと思っていました。でも、この本を読んで、健聴者が手話を覚えて、助け合いをするといいなと思いました。

もし、耳の聞こえない方がいたら、手話であいさつしてみたいなとも思いました。また何かこまったことがあったら、手話で会話できたら、耳が不自由な人たちも少し安心できるようになるとわかりました。

最初、ぼくは「ふくしってなんだろう。」と思っていました。本を読んで、ふくしとは、生きているみんなが、ふだんのくらしを幸せにすごすことなのだと分かりました。

健康な人が何か体に不自由のある人の気持ちを理解して、みんなにふくしの心が広がる社会になると良いと思います。これからは、体の不自由な方だけでなくお年より、近所の方々、家族や友達、外国の方々みんなのふだんのくらしが幸せになるように、いろいろな学習をしてみたいなと思います。そして健康なぼくたちが、思いやりの心で行動できるようになれたらすばらしいなと思いました。

小学四年生の部

『私たちにできること』

津嘉山小学校　四年　上原　凜々華

私は、「福祉」と聞くと、「高れい者」や「障害者」をイメージします。それは、私のお母さんが障害をもった子どもたちが通う特別支援学校の先生をしているからです。

お母さんは、障害をもった生徒が社会に出て幸せにくらせるように障害による学習上または、生活上の困難を克服し、自立するために必要な知識や技能を教えているそうです。

そこで私は、自分にできる「福祉」ってなんだろう。と思いました。それは、自分のおじいちゃん、おばあちゃんが幸せにすごすことをサポートすることなんだなと思いました。

おじいちゃん、おばあちゃんの生活をサポートしていくには、ひざをいためないように低いところにある物は取ってあげたり、歯がぬけないために、食べ物は、やわらかくするなどのことを、日ごろから心がけて、自分のおじいちゃん、おばあちゃんの生活をサポートし、みんなで元気にすごせるようにしたいです。

身の回りにいるおじいちゃん、おばあちゃんたちは、けんこうのために、公園を散歩したり、私たちの登下校

を見守ってくれている見守りパトロールなどのボランティア活動をしている高れい者の人たちがいます。でも、ボランティア活動ができるくらいの元気な高れい者ばかりがいるとはかぎりません。なので、あまり元気のない人たちは、家族やヘルパーさんといっしょに生活しなければなりません。それに、今では、約三人の人で一人の高れい者をささえられますが、私が、四十才になる三十年後の二千五十年ごろには、一人の人で一人の高れい者をささえられるようになるということが分かりました。それに、今は、一年で約二百人ずつ高れい者がふえていて、このように、高れい者の人数がどんどんふえていくということを高れい化社会ということも分かりました。

わたしは、このようなことから、高れい者の人たちの生活は、いろんな人がささえていると思います。

わたしは、大人になったら、今まで私のくらしをささえてくれたお父さん、お母さんの介ごなどをし、自分のおじいちゃん、おばあちゃんを大切にし、いつまでも、おだやかな心、やさしい心をわすれずに、ずっと福祉をつづけて、みんなで幸せな日々をすごしていきたいです

小学四年生の部

『高齢者と認知症について』

津嘉山小学校　四年　親富祖　美希

私は、今まで高齢社会の問題について、大したことではないと思っていました。だけど、高齢者が地いき見守りパトロールや子育てサロンなどを私達のためにやってくれていることを知って、高齢者は私達をささえてくれている、大切な人達だと思いました。その高齢者の体の変化で力が弱くなったり、目が見えづらくなったり、年をとるほど認知症になるかのうせいが高くなることなどを知り、今後高齢者がもっとふえてくる事は、大きな問題だと感じました。

次に、認知症について私は、大変な病気だけしか分かっていなかったし、あまり何も思ってはいませんでしたでも、「認知症ってなあに？」という認知症サポーター小学生養成こう座副読本を見て、認知症のことについて初めて学びました。例えば、様々な原いんで脳の細ぼうが死んでしまったり、あるいは脳がちぢんでしまったりして働きが悪くなる脳の病気ということや、認知症になってしまうと色々なことが覚えられなくなったり、忘れてしまったりして、自分の周りのことが分からなくなってしまうことなどです。また、認知症の人は失ぱいばかりが続いて怒られてばかりいると、不安な気持ちになったり、なやんだりしてしまうので、かんきょうや周りの人

のせっし方が変われば症じょうが良くなったり、症じょうが悪くなるのがおそくなるそうです。私はそれを知って、周りにいる自分達も関係していることだし、認知症はかん単には治せない大変な病気なのだと感じました。

それから、もし私のお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんが認知症になってしまったら、私も認知症の人の気持ちになってみて、悲しませたり不安にさせたりしないように、なるべく工夫しながら、一しょに生活していきたいです。それとは反対に、もし私が認知症になってしまったら、安心してくらせるように、周りの人は私が失ぱいしてもせめずに、やさしくしてほしいなと思います。だから、未来では認知症の人が失ぱいしてもせめないで、やさしくせっしてあげることが当たり前の社会になっていてほしいです。

そして、近いうちに認知症を治せる薬が開発されて、しょう来、認知症は治る病気になっているといいなと思いました。みんなが高齢者や認知症の人をそんけいしてやさしくせっしてあげている未来だったら、高齢者や認知症になってしまった人も周りの人達にとっても、とてもくらしやすい社会になって、すてきだなと思います。

最後に、これからは高齢者や認知症の人が不安な気持ちにならずに、安心して楽しく生活できるように、私達がその人達の気持ちを受け止めて理かいし、そんけいしておたがいを思いやる気持ちや、やさしくおだやかな心を忘れないようにしたいです。

小学四年生の部

『福祉は大切』

津嘉山小学校　四年　川上　日暖

そう合の時間に福祉について学びました。ちむぐくるやユニバーサルデザイン、ピクトグラム、高れい者等の話を聞きました。

ぼくが、びっくりしたことはピクトグラムに出てくる人物に名前があってピクトさんと知ったことと、いろんな人が見て一目でメッセージが伝えるということです。ぼくがよく見るピクトグラムは、ひじょう口のマークです。ほかにもトイレのマークや車イス、エスカレーターなども見かけました。妹がまだ字も読めないころ、スーパーでトイレをさがして自分がみつけることができたことを思いだしました。それも絵も見ただけで、意味が分かるからピクトグラムはべん利でやさしいアイディアだと思いました。

ユニバーサルデザインも、日本語も分からない外国人が見ても分かるからこれも、べん利ですごいアイディアだと思いました。

高れい者のお話では、高れいになるとほねが弱くなったり、こしがまがったり、耳が聞こえづらくなったり、目のし力が下ったりすることを聞きました。どんどん体

が不自由になっていくことが分かりました。それで自分のおじいちゃんおばあちゃんがなにか不自由になったときに助けてあげたいと思いました。ほかにもこまっている高れい者のおじいちゃんおばあちゃんを見かけたら声をかけてあげたいです。

ほかにも、こまっている目が見えない人、車イスの人道にまよっている人、小さな子どもとかいると思うのでこれからはチムグクルの心をもって福祉が広がって、みんなが助け合う世の中にしたいです。

このじゅぎょうで「チムグクル」という言葉は、沖縄の方言で意味が「おもいやり」と分かりました。家でインターネットで調べてみたら、

「心に宿る深い想い、真心」「助け合いのせいしん」など心のやさしさやゆたかさを表した言葉と出てきました。とてもいい言葉だと思いました。

これまでの話を聞いて福祉は「ふだんのくらしのしあわせに」と学びました。こまっている人や、弱い人を助けることで、みんなが幸せにくらすためのとても大切なことだと知りました。ぼくも福祉の心を大切にして、こまっている人がいたらすぐに助けれるようにすごしていきたいです。

小学四年生の部

『高齢者について』

津嘉山小学校　四年　照屋　柚亜

私は総合学習で「高齢者」について学習しました。

「高齢者」とは、六十五才以上の人の事を意味していて六十五才からは定年退しょくができることや、高齢者の体の変化について、また、高齢者への接し方など、講話を聞いて分かりました。

私は、六十五才以上は「高齢者だ」ということを聞いて

「私のおじいちゃん、おばあちゃんも高齢者なんだ。」

と思いました。そして、高齢になると、体の力が弱くなることを聞いて、私は、

「たしかにそうだな。」

と思いました。

私のおじいちゃんは、私がまだ小さいころは、一緒に家でかくれんぼをして遊んでいたけれど、今は、手や足の力が弱くなったり、かぜを引きやすくなりました。それで、たしかに、高齢者になると力が弱くなるのは本当だなと思いました。でも、私のおばあちゃんは、まだ元気でお仕事もしているから、高齢者の中にも元気な方もいるという話も、また本当だな、と思います。私は高齢者の方々がしている町のパトロールをたまに見かけるこ

とがあります。私は今までは、何も言わずに通りすぎていたから、講話を聞いて、高齢者の方々も町の人のためにがんばっていることを知り、次出会ったときは、感しゃの気持ちを込めて、元気よくあいさつをしたいと思いました。そして今まではおばあちゃんやお父さん、お母さんが、おじいちゃんのことを助けてあげていたので、私はこの講話を聞いて、高齢者の体のつくりについてもよく分かったので、次は、私がおじいちゃんやおばあちゃんたちの役に立ちたいです。

例えば、おじいちゃんが歩くときに体を支えてあげたり、元気になれるようにおしゃべりをしてあげたりしたいです。そして、これからは、おじいちゃんやおばあちゃんだけじゃなくて、町にいる高齢者が困っていたら、助けてあげられるようにしたいです。そして、今までがんばってきてくれた高齢者の方に、そんけいと、感しゃの気持ちを持ち、高齢の方々を大事にしていきたいです

小学四年生の部

『ふだんのくらしのしあわせ』

津嘉山小学校　四年　林　和花

わたしは、最初、福祉という言葉を聞いたとき「福祉ってなんだろう？」と思いました。調べてみると、高れい者や障害者など一部の人のためのものではなく、私たち全員「みんなのためのもの」と書いていました。福祉って意外と自分たちのすぐ近くにあると思いました。例えば、点字や音の出る信号、点字ブロックなど人々が分かりやすく利用できるようにくふうされていると分かりました。わたしは、福祉の勉強の調べ学習でホースセラピーについて調べました。ホースセラピーは、しりょうが少なく調べるのがむずかしいと親は言っていましたがわたしは、どうしても調べたかったので調べました。わたしがホースセラピーを調べてすごいと思ったのがセラピーホースの歴史と身体的こう果、心理的こう果です。セラピーホースの歴史は、ギリシア・ローマの時代までさかのぼると言われています。わたしは、セラピーホースって最近できたと思っていましたが、まさか、ギリシア・ローマまでさかのぼるとはおどろきでした。

二つ目は、セラピーホースの心理的こう果と身体的こう果です。馬にのるだけで、体力がついたり、体が少しだけ元気になったりすることまた、馬にのると、心がおだやかになることがすごいと思いました。セラピーホー

スのしせつは、沖縄の南城市にあるのでわたしはぜひ、行ってみたいです。

次に、福祉のこう話について分かったことを書きたいと思います。一回目のこう話のテーマは福祉ってなんだろう？です。ユニバーサルデザインやバリアフリーなど障害者や高れい者が使いやすく利用するためのものについて分かりました。二回目のこう話は、高れい者についてをテーマに勉強しました。高れい者の体の変化や高れい者社会、ボランティアなどです。一番すごいと思ったのは、高れい者がボランティアの活動をしているということです。その活動は、主に五つあります。

一つ目は、地いき見守りパトロールです。子供たちが安全に登校できるように毎日、パトロールをしてくれます。わざわざ、朝早く起きてあいさつもかかさずしてくれます。

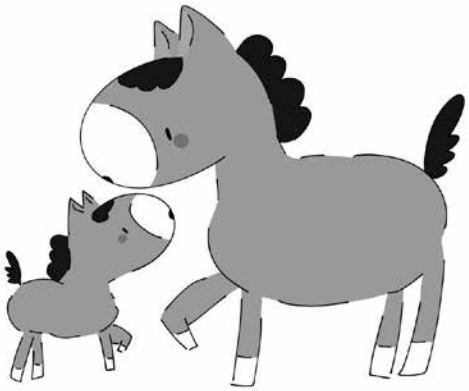
二つ目は、子育てサロン・高れい者サロンの手伝いです。赤ちゃんや高れい者のごはんの用意などをしてくれます。

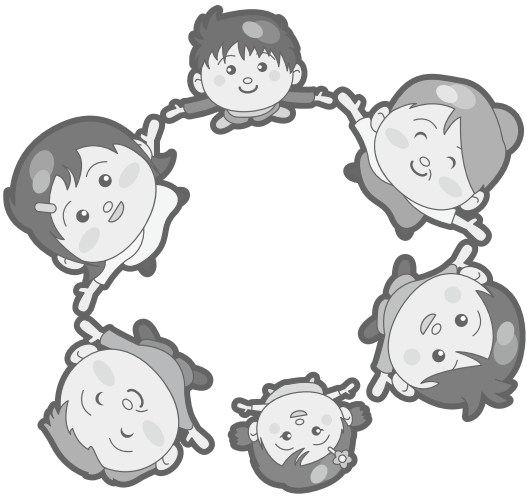
三つ目は、公民館でのミニデイです。レクレーションやのうトレ、高れい者同士でごはんを食べたりと、体や頭をきたえます。

四つ目は、運動教室です。高れい者たちがまわりの人に自分たちのせいでめいわくにならないようにときん肉やほねをきたえます。

五つ目は、男塾です。高れい者が、周りの人のにめいわくをかけないようにと料理などの家事を習う場所です

ふだんのくらしのしあわせを実げんするためにわたしたちが、今、できることをさがしてみんなの役に立ちたいです。みんなが、笑顔でハッピーな街になりますように。





小学四年生の部

『弟と福祉』

津嘉山小学校　四年　真喜志　夢実

私は、「福祉」について、総合学習で学びました。福祉とは、「ふだんのくらしの幸せ」を実現するためにあると知りました。そして福祉は、障害者や高齢者のためだけではなく、私やすべての人のためにあるのだと分かり、うれしくなりました。そして私も、みんなの幸せの実現のために、がんばりたいと思いました。また、一人ひとりの思いやりが必要、大切だと心から思いました。

なぜ私が、福祉の大切さや幸せの実現に向けてがんばりたいのかというと、私の弟が障害をもっているからです。

私の弟は、自閉症スペクトラム症です。私は姉として弟に、福祉の心、ちむぐくるのある世の中で、差別なく生きてほしいです。弟が気持ちよく過ごせるように、また、弟の力になりたいと思い、勉強をがんばっています

私の弟はしゃべれません。弟がしゃべれるようになるには、訓練が必要です。その訓練に欠かせないのが、「言語聴覚士」の存在です。言語聴覚士は、言葉の専門の仕事をし、沖縄県でもあまり多くはいません。言語聴覚士の方に、「仕事をしていて良かったと思うことは、どんな時ですか」

と質問をすると、

「おちこんでいる人が喜んだりする時に、良かったと実感します。」

と教えてくれました。私は、いい仕事だなと思いました

また、私は言語聴覚士の仕事は脳の病気でしゃべれなくなった高齢者の方のリハビリをしたり、その家族の方たちと話をしたりするので、みんなのためにがんばって役立っていると思いました。

私は、大人になったら言語聴覚士さんのように、いろいろな人を助けていき、今の世の中を変えていって、弟を幸せにしたいです。

十年後、二十年後には、今よりももっと、福祉が充実し、私が思っているような社会に変わっていたら、とてもうれしいです。

「ふだんのくらしのしあわせ」

の実現を・・・

小学四年生の部

『みんなを助ける赤い羽根共同募金』

南風原小学校　四年　江口　果穂

みなさんは、赤い羽根共同募金を知っていますか。赤い羽根共同募金は、スーパーや学校、会社などで集められるぜん意のきふ金です。令和二年には、全国で約百六十八億円も集まったそうです。日本だけでなく、外国でも行われている活動です。

わたしも学校で、募金をしたことがあります。その時は、例えば首里城の募金が首里城をたて直すためだけに使われているように、お金にこまっている人に使われる自分のためのお金ではないと思っていました。

だけど赤い羽根共同募金のことを、聞いたり調べたりして、募金で集まったお金の使い道はたくさんあることが分かりました。お年よりのためやしょう害のある人、そして子どもや子育て中のお母さんやお父さんたちのためにも使われていたのです。

わたしの町ではその子どものための中に、子育てサロンがありました。わたしも小さいころ、お母さんと通っていて、お母さんは沖縄に引っこししてきて心細かった時そこにい場所ができて、友達もできてとても助かったそうです。わたしも、そこにいっしょに行っていた子とは学校がちがっても今でも友達です。だから子育てサロ

ンがあってよかったなと思っています。

自分も赤い羽根共同募金と関係があってとてもびっくりしました。

赤い羽根共同募金は赤ちゃんからお年よりまでみんなを助けるとても大切なものです。

今年も十月から赤い羽根共同募金運動が始まっています。わたしは、少しずつでも募金ができたらいいなと思います。

小学四年生の部

『話をきいて自分にできること』

南風原小学校　四年　宮城　ひより

私が福祉の中で心に残ったことは聴覚しょうがい、車いす利用者、高れい者、にん知症について話をききました。

まずさいしょに高れい者のくらしについてききました分かったことは、65さい以上のことを高れい者ということです。なぜ65さい以上のことを高れい者というかと言うと、仕事を卒業する人が多いからだそうです。そしてそれを知って私はそうなんだと初めて知りました。そして体の変化は大きく変わって、シワができて、運動は力が弱くなっていって私たちと体がいろいろ変化していると知りました。この中の話で大切だと思ったことはやさしい心おだやかな心をわすれないことです。私はこれからもこのやさしい心おだやかな心をわすれないようにしたいです。

次に車いす利用者の三代達也さんに話をききました。そしてタイが一番好きと言っていました。タイはバリアフリーがまだ整っていないと言っていたのでなぜタイが一番好きなのかが気になりました。そしたらみんなが助けてくれると言っていたので、助けることはすごいなと思いました。そして私はゆいまーるのことを言っていたので私はこれからもゆいまーるの力を使って困っている

人を助けていきたいです。

そして次ににん知症について話をききました。そしてきいて分かったことは、きおくのつぼが小さくなって入らなくなることです。だけど昔のきおくは入っているときいて、昔のきおくは残っていないと思っていたけど残っていて、昔の話をしてよろこばせたいです。そして大切なことは見守る、ゆっくりと、えがおで、やさしい言葉を忘れないようにしたいです。

最後に聴覚しょうがいの人の話をききました。そしてポイントは気づく行動すると言っていました。そして気づいたら、「大丈夫？」「どうしたの？」と声をかけて行動したいです。

この四つの話をきいて、これからも自分にできることをがんばっていきたいです。困っている人がいたら声をかけたり、助けたりしてくらしやすい町にしていきたいです。

社会福祉法人 南風原町社会福祉協議会

福祉作文コンクール作品集

令和４年３月５日

発　行　社会福祉法人　南風原町社会福祉協議会
　　福祉作文コンクール作品選考委員会
印　刷　株式会社　うるま印刷
　　電話 098-889-5362　FAX 098-889-5813

「この事業は赤い羽根共同募金の助成を受けて実施します」